原著

「美術の授業実践から」

香 月 欣 浩 *

Through the Practice of my Art Teaching

Yoshihiro　Katsuki

暮らしはどんどん便利になっていく一方で、人間はどんどん余裕を失っていっている。
洗濯機や掃除機が発明され、自分に使える時間が増えたはずなのに、全く余裕なく逆に忙しくなっている。
学校も同じで、昔は『読み書きそろばん』ができればよかった。なの今は、日本語もろくにできていない子どもに英語だ、コンピューターだとせかす。芸術と勉強どちらが大切？迷うことなく勉強を選ぶ世の中だ。
だからこそ、芸術の存在は重要だ。
学生に美術は好きか？と聞いたことがある。するとクラスの半分は『嫌い』もしくは『苦手』に手を挙げた。
しかし人間は本来、ものを作り出す事や表現する欲求を持っている。生まれ育っていく環境のどこかで、苦手意識を植え付けられていると考える。
今からそれを分析し、美術という表現を楽しく行える手だてを考えていこうと思う。

Key words:　すきこそ物の上手なれ、自主性、達成感、やる気、継続する力

1　はじめに

美術が嫌い、苦手と答えた学生たちにその理由を聞 いたことがある。すると、ほとんどが以下の理由を述べた。

・自分が気に入っていた作品をやり直しさせられた。
・先生は自分が気に入らないと認めてくれない。
・うまく作品ができない。自信がない。
・ルールや決まり（課題）があるので好きにできない。

自信がない、下手だから嫌だ。というのだが、実際 に描いたデッサンを見ると立派だった。これだけ描けるのに「私は、美術は苦手です。下手です。」と言う。
あきらかに、意欲をもぎとられていた。学生たちが持っている意欲に再び火をつけるための手だてを、ここから考えていきたいと思う。

2　授業の要素

授業では学生が楽しめ、面白く、もっと受けたい、頑張りたいと思えれば理想的である。そのためにはいくつかの要素がある。

A. 自分を認めてもらえる
B. 興味を持てる内容
C. ほどよい抵抗感がある（課題に挑戦する）
D. 達成感を感じる

3　自分を認めてもらえる

自由を許された表現の世界で１番大切なこと。
そして最低限保証される条件がある。
それは、『する事を自分で決める』ということだ。
する事を自分で決めるは、

a. 何をするのか決める。
b. 題を決める。
c. 領域を決める。
d. 道具や材料を考える。
e. やり方を考える。

の５つの要素がある。
どの表現活動にもこの５つが含まれている。この内容や方法の組み合わせは、人の数だけ発想が違い無限だ。

＊　四條畷学園短期大学　保育学科

これが表現活動の面白いところである。
なのに、指導者が答え（上記のabcde）を１つだけにしぼってしまうから、面白くなくなる。
指導者の描いたレール（課題やルール）を超えた発想や表現を認めない。
禁止や落ちこぼれの発生である。

「私たちの身の回りには、数学の様に解答が１つではない事の方が多い。そうした時に、答えが１つだと思い込んでいると、複数の答えが存在しても、他の正解を誤りと認識してしまう。それだけでなく、それを排除しようとする力が働くから厄介だ。１つの答えに固執して周りが見えなくなる事による弊害は、自由な発想を封じ込め、新しい目を摘み取ってしまう。これは、自分自身に考える力がなくなるだけでなく、自分以外の違う考えの人が考えようとする自由さえ奪ってしまう。」
注）参照　広瀬之宏著『答えは一つとは限らない』（遊タイム出版）

1+1= 2である。1+1=5とすれば、これはなぞなぞでない限り誤りである。これは相手自身を否定した事にはならない。明らかに決まりや法則で成り立っている数学世界の話であるのだから誤りである。しかし、表現活動を否定するという事は、表現者の内部（精神、心、自我）を否定した事となる。ましてや表現方法が拙く幅のない者に対して、多くの要求をすると、嫌になるのは当然の話だ。だから上記のabcdeの自由を保障した上で、表現活動を始めるべきである。これによって表現する不安が取り除かれ、安心して自由な表現が可能となるのである。そしてその表現を認めてもらえたとき、人は自信を得る。ただし、危ない刃物の使い方をしているとか、制作準備に不備がある場合、注意する事は必要である。これは否定ではなく指導である。

４　興味を持てる内容
美術は本来、生活に密接したものである。デザインはその最たるもので、私たちの身の回りにある生活品はデザインなしに考えられない。ティッシュの箱も、家電品も車も、服もアクセサリーにも、デザインが施されている。
だから現代人は毎日、美術に触れている事になる。美術は遠い存在、関係のない存在ではない、暮らしの中には美術が溢れ、人はそれを取捨選択して暮らしている。美術は決して難しいものではなく、誰もができる世界だという事を学生たちに気付かせる事が必要だ。学生たちが毎日着てくる服の選択。これもまさに美術である。
「この色のシャツにはこのジーンズとベルト。帽子は色鮮やかにいき、靴は控えめにまとめよう。」
なにげなくしている買い物も同じで、自分のセンスを磨いたり試したりしている事に他ならない。結婚相手を見つける事でさえ、自分の総合的センスを結集させて相手を選んでいるとも言える。そんな風に考えると美術とはなんと私たちの生活に密接に関わっていると気付くはずである。だからこそ、激化するこの学歴社会においても美術は重要視され、この世からなくなっていない。話や説明を学生たちの興味のあるところに落とし込んでしてやると、表現に抵抗なく入っていけるようである。

５　ほどよい抵抗感がある（課題に挑戦する）
表現は自由だ。
しかし、放っておいても制約というものが出てくる。締め切りだとか、大きさだとか、材料費だとかである。
人はその中で最大限の自由を使い表現をしていく。
学生たちに「美術は自由です」と言うとすぐに勘違いする。制作中に私語を堂々としたり、忘れ物をしたり、片付けをしないなどである。
これは美術で言うところの自由ではない。
私語は制作の邪魔になる。人の邪魔はもちろんの事、自分の邪魔をしている事になる。創意工夫をするためには、知恵と知識と感覚を総動員しなければならない。そのためには、過度の私語はいらないと何度も言い続けている。すると教室に緊張感が張りつめ、皆自分の世界に入っていく。

自由制作とは別に学生たちに毎授業させた事がある。デッサンである。
美術を嫌いな人は、大概これが嫌いである。それを学生の意思とは関係なしにやらせるのには、大きな意味がある。

１）一見、面白くなく嫌そうな事も続けると面白

さが発見できる事。
2）苦手な事も継続する事で少しずつでも成果があるという事。

それを知ってほしかった。
社会人になったら、好きな事ばかりしていくわけにはいかない。嫌な事もするから、お給料ももらえる。その嫌な事をいかに楽しんでいくかに人の幸せ、不幸せは左右されると考える。

はじめはデッサンが嫌いな学生がほとんどだった。しかし、回を重ねるごとに学生たちは熱中していき、こちらが何も言わないのに、より高度な表現を求め実践していった。
陰のつけ方や、質感の表し方などである。これは、学生たちが上記1）2）の回を重ねるうちに体感していったからに他ならない。ただし、毎授業に行ういわば強制に近いデッサンである。
指導者として危険性も充分把握した上で、学生たちに伝えた事がある。

「好きなものを描きなさい」

描くものまで強制されては、自由度はぐんと減る。逆に好きなものでいいのなら、やる気も起こる。
ネコ好きな人がネコを描くとうまい。好きなものの特徴や面白さを詳しく知っているので、自然とそれ が表現され上手くできるものだ。好きこそものの上手なれである。

学生たちは、初めは好きなものを描いていたが、上達してくると次のレベルを自ら求める様になり、次第に苦手だったものまで挑戦する様になっていった。

6　達成感を感じる

前向きな努力や頑張りの向こうには、いい事が待っている。自分の成長であり、達成感である。それを体感した者は意欲を増す。その意欲は次への挑戦につながり、美術で得た意欲は、美術だけにとどまらず、多方面にも影響を及ぼす。意欲は関心の幅をも広げていく。勉強が、からっきし駄目だった子どもが、けん玉大会で優勝し自信をつけ、成績が伸びるといったことはよくあることだ。
「続ければ成果がある」ひとつの世界でコツをつかむと他の領域でもその応用がきく。

新しい事をする時そこには、今まで知らなかった挑戦や苦しみや工夫や発見や失敗や成功が待っている。意欲があればそれらを「楽しみ」と感じる様になってくる。
「ああ、大変やったし不安だったけど、する事を自分で決めて、あきらめず工夫して挑戦を続けたら自分でも驚く位いい作品ができた。」と多くの学生たちから声を聞いている。そして達成感を得た者は、放っておいても自分から次の挑戦をする様になる。

7　まとめにかえて

美術指導の場を小学校から短期大学に変えて半年が過ぎた。
はじめに持っていた不安は、授業を受ける児童と学生の年齢差であった。
小学生と同じ接し方では駄目だろう。
短大生はもう大人だから「美術なんていらない」という冷めた子がいるのではないか？様々な疑問と不安を抱えたまま授業が始まった。１３年間で得た経験をたよりに授業を行っていく。
私にはそれしかなかった。
たまたま出会った学生たちの素直さに助けられ、ここまでやってこれた。
失敗も多くあったが意欲を失う事なく続ける事ができたのは、「美術を心から楽しいと感じている」と多くの学生たちが書いてくれた感想文のおかげだった。

学生同様、指導者も自分を認めてもらえ、問題意識を持ち、課題に挑戦し、達成感を感じるからこそ意欲を増し、よりよい授業をしようと改善していく。
子どもも大人も、学生も指導者も関係なく、人間として共通の動機や達成感や意欲を持って行動しているのだと美術の授業を実践していく事で学んだ。
一貫して大切だと感じた事は、授業の形式や方法ではなく、『おもいやり』だった。

いろいろな人間がいる。性格や得意分野、興味もそれぞれ違った学生たち。そのすべての違いを尊重した上で、助言し励まし、課題し、時に注意し語りかける。
そうする事でこちらの思いや熱意が伝わった時、初めて相手は意欲的に授業に向かって来てくれるのだと実感した。今後も学生たちが美術の表現を通して、表現力をつけ、多方面にも挑戦していく意欲を増していける様、指導の多様性を研究していこうと思っている。

－2008. 1. 15 受稿 、2008. 1. 20 受理－